

日英語の会話に見られる他動性: 動作主のあらわれかたについての一考察

但馬 香里

A Study of Transitivity:
Some Observations on the Agent in Japanese and English Discourse

Kaori Tajima

Abstract

The purpose of this study is to observe and analyze conversation, especially focus on the agentivity in Japanese and English discourse. Ikegami (1991) showed that English is the “do-language” and Japanese is the “become-language”, however, these findings were not collected from the natural data. Therefore, this study will examine his findings. The data showed that the Japanese has a strong tendency to drop subjects, then, there were also substitute elements to support these subject ellipsis. The findings supported the possibility of Ikegami’s theoretical background.

1. はじめに

本論文の目的は、ことばを用いることによって、あるイベント（出来事）を概念化するにあたり、果たして言語¹によってそのイベント（出来事）の捉え方が、どのような異なりを伴ってあらわれてくるのかという点について、実際の会話を分析し、考察を行うものである。研究題材としては、日本語と英語における会話の比較観察を行う。

会話を分析するにあたり、さまざまな会話の構成要素が考えられるため、本稿では、分析の観点として、Ikegami (1991)を参考にしながら、会話が進行する際の‘agentivity’（動作主性）の違いがどのようにあらわれているのかを主に観察していくこととする。特に、‘agent’（動作主）があらわれる場合について、それがどのように強調されているのか、あるいは、強調されていないのか、という点について観察を行う。

2. 前提

¹ ここでは英語と日本語で検証を行う。

2. 1 先行研究

日本語と英語における最も大きな言語的特徴の違いは、池上（1981）、Ikegami（1991）の研究において端的なことばで説明されている。Ikegamiは、日本語と英語を比較すると、出来事を表現する方法、すなわちイベント（出来事）の切り取り方がまったく異なっていると述べている。Ikegamiは、研究対象を小説の一節や詩的言語、あるいは創作したことばを題材としながら分析を行った結果、次のような結論に至った。すなわち、英語では、イベントにおけるある一定のものに焦点が当てられて言語表現が行われているのに対し、日本語では、イベント全体の状況を捉えて言語で表現する傾向にあるというのである。Ikegamiのことばを借りれば、英語では“do-language”（する的表现）を行っているのに対し、日本語では“become-language”（なる的表现）を行っているというのである。

2. 2 Research question

それでは、Ikegamiにおけるイベント（出来事）

の表現の仕方は、実際の会話においても同様な結果を得ることができるのであろうか。すなわち、英語では「個体」に焦点があてられることにより、「する的表现」を行い、また日本語では「全体としての出来事」に焦点があてられることにより、「なる的表现」を行っているのであろうか。本研究では、この点について実際のデータをもとに検証を行いたい。分析を行うにあたり、動作主がどのような形態であらわれているのか、という点に着目し、日本語と英語の観察を行う。

3. 方法

3.1 枠組み

Ikegami は、日本語と英語の観察を行った結果、大きく分けて4つの結果を導き出した。以下の表はIkegamiの結果をまとめたものである。

表1：日英語表現方法の違い

英語	日本語
Change in locus 場所に焦点を置いているか	Change in state 状態に焦点を置いているか
Focus on the Individuum 個々のものに焦点を置いているか	Focus on the event as a whole イベント全体に焦点を置いているか
Goal-oriented ゴールから見るか	Process-oriented プロセスを見るか
Emphasis on agentivity 動作主性の強調をするか	Suppression of agentivity 動作主性の強調はしないか

まず、Ikegami による英語の結果を見ると、イベント(出来事)の捉え方はあくまでも、「個体」として

突出しているように見える。そのため、ある個体が物事を「する」という表現を行っているという結論に至っているようである。また、日本語では、イベントの捉え方は何かが突出したのではなく、あくまでも「全体の状況」を捉えているように見える。そのため、「なる」的表现を行っているという結論に至っているようである。

しかしながら、Ikegami の結果は、あくまでも自然発話から導き出した結果ではない。そのため、日常的な会話を分析することにより、さらなる検証が可能である。ただし、表にある全ての結果を検証することは不可能である。従って本研究では、動作主がどのようなあらわれ方をしているのか、という点に着目し、その強調のされ方がどのような形態になっているのかという点についてのみ観察を試みる。

3.2 データ

分析に使われたデータは、日本人およびアメリカ人大学生、あるいは大学院生の会話をテープに録音し、文字化を行ったものである。約1時間半の会話がデータとして収集されたが、そのうち、日本語、英語ともに3つのエピソードを抜き出し、分析を行った。日本語では269発話、英語では104発話が観察された。

4. 分析(ケーススタディ)

4.1 日本語の場合

それでは、実際の会話を観察しながら、その特徴を見ていきたい。まず始めに、日本語に見られるagent(動作主)のあらわれ方がどのように見られるのかという点について観察を行う。

4.1.1 主語の省略

日本語のエピソードのうち、そのほとんどの発話の主語の省略という形式を用いていた。例1は女性同士の会話である。会話の中で特に注目している点については、下線を引いているが、ここでは、主語が省略された部分に下線が引かれている。

例1) 展覧会のタイトルを決めた際の話

- 163 で毎週、街で会って、2週間に一度集まって、
そういう風に名前とか考えていて一、
 164 うん。
 165 もっと『どうしよっか、どうしよっか』って言った
時に一、『何かいいのなかな』って、それぞれが
何かポーっとしてね一、
 166 うん。
 167 なんか文字を探してたの。で、たまたまメニューを
見たら一、
 168 うん
 169 [味の、何かラベルがね、『やや辛口』っていう
 風に書いてあって一、だからそれがちょっと書いて
 あって一、で、22²っていうのは捨てがたいし、
 170 うん。
 171 やや辛口っていうのも捨てがたいから一、『じゃあ
サブタイトルにしよう』ってね
 172 あーあーあーあー。

例1の163行目に注目すると、毎週街で会い、展覧会のタイトルを考えるのは、この話を行っている話し手とその仲間であるはずだが、その箇所は省略されていることがわかる。同様に、他に下線が引いてある部分についても、主語は全て話し手自身とその仲間のことであるが、そのことに関しては、話題の中では具体的には一切明示されていない。

4.1.2 体言止め

それでは、主語を省略できる要因には何があるのだろうか？その理由としてはいくつか考えられるが、一つには体言止めが考えられる。例2は教育実習についての会話の抜粋だが、2行目にあるように、「(私が)教育実習に行くことは絶対に無理である」という述部が省略されている。

日本語の場合は、会話が行われる際には、断片的な情報をつなぎあわせるだけでもその会話を続け

² 「22」という数字は、この会話の中では、展覧会のタイトルの候補にあがっている数字のことである。展覧会の参加者が22人であるために、この数字があげられている。

ることができるため、データの中でもこのような表現方法が数多く観察された。

例2) 教育実習

- 01 教育実習なのね一。
 02 高校生の教育実習？絶対無理。
 03 そんな
 04 [は！]

4.1.3 語順の倒置

体言止めと関連して、日本語において主語が省略される場合が多い理由には、語順も関係しているようである。例3の221行目では、「家族中、みんなに言おうと思った」と言うところを、最後に「家族中に」ということばが来ている。

例3) シャモアのケーキ

- 218 だってあそこのほら、大ちゃんちのケーキ。
 219 あっ、そうそうそう。何だっけ、シャモア？
 220 [シャ
 シャモア。うんうん。
 221 シャモア。そう。あたし、そう、みんなに
言おうと思ったんだ、家族中に。でもさ、
 斎藤さんの一、
 222 ねえ、おばさんとこの間話したんだけど
 ね一、
 223 [うんうん]

このような表現方法は、単独であらわれることもあるが、体言止めと倒置が組み合わされた形式であらわれることもある。

例5の28行目では、本来ならば「教育実習なんて3年来たっけー？」となるところだが、語順の倒置が起こっていることがわかる。さらに、31行目では、本来ならば「二宮先生っていう人がいた」となり、32行目では「二宮先生っていう人だれ？」となるべき箇所の語順が逆になっており、さらに「～っていう人」という形式からもわかるように、体言止めとなっていることがわかる。

例5) 先生の名前

- 28 えー、どうだったっけー？来たっけー？教育実習生なんて3年に。
- 29 高校生に一、の一、時の一、その教育実習生？
- 30 いたっけー？
- 31 ねー。いた。二宮先生っていう人。
- 32 だれ、二宮先生っていう人？
- 33 ちょっと後ろに結んでいる
- 34 [あっ、絵画の先生
- じゃん。
- 35 そうよ。

4.1.4 所有格

次に観察されたことは、主語を明示的に示さない代わりに、主語の形態を所有格に変える表現方法を取っていたという点である。例6のように、「私が担当する予定になっている学年」とは言わずに、「あたしの学年」という言い方をしているのである。

例6) 担当学年

- 12 あー、あたしの学年って、教育実習なめてるって感じ。
- 13 うーん・・・。ふーん。

4.1.5 受動態

さらに日本語では、受動態で表現することにより、主語を明示する必要なしに、イベント(出来事)を表現することを可能とさせていた。また、実際にもこの形式は会話の中では良く使われていることが観察された。

例7) 注目度合い

- 82 でも、普通のところに行くよりはー、
- 83 うんうん。
- 84 まだ見られない。
- 85 まあね。普通のところに行ったら、すごい見られるんでしょう？
- 86 すごい見られる。

例7の85行目では、「自分は周りの人から(ジロジロ)見られる」というところを、「すごい見られる」という表現で終わらせている。また、「見られる」の後の音はリエゾンが起こっており、「見られるのでしょうか？」という表現であらわれされるところが、「見られるんでしょう？」と言われていた。

4.1.6 あいまい表現

最後に、会話の中で何の脈絡もなく使われている表現で、よく目に付いた表現が少なくとも2つ見受けられた。一つは「とか」であり、もう一つは「なんか」である。

例8) 22という数字について

- 126 『なんだろ、この22』とかって思って。
この22期展とかかかって思ったんだけど
- 127 何人展って言うと、
- 128 うん、うん。
- 129 急にメンバーが減った時に困るなーって
思って。
- 130 八八八。

例8では、「~この22」と思ったのは話し手本人であるため、本当ならば、「と違って」と言えば済むところであるが、その要素を断定せずに、かわりに「とか」が用いられている。「とか」は、会話の中では男女を問わず頻繁に起きており、「~など」という意味の、実質的な複数表現としてではなく、話し手の話し方をぼかす機能を持っているようである。

次の例9では、「なんか」は省略されても意味は十分伝わるのだが、あえて「なんか」を使う表現が頻繁に使われていた。また、「なんか」は、会話が突然始まる箇所にも多く使われていた。これらの「なんか」の機能は、聞き手が突然話し手の話を聞いて驚かないように、話し手が、聞き手に聞く準備のクッションを与えているようである。

例9) 冬季限定チョコ

- 245 なんか友だちからー、
 246 [うん
 247 お姉ちゃんがもらってー、
 248 うん。
 249 もん、なんかうちで惚れ込んで結構買いに行っただけどー、
 250 うん。
 251 あの、結構冬季限定、チョコって出てるじゃない？
 252 うんうん。
 253 [最近グリコとかでも。
 254 うん。
 255 ああいう感じなんだけど、ほんとにおいしいの。
 256 うんうん。
 257 なんか生クリームたっぷりって感じの。
 258 えーおいしそー。

4.2 英語の場合

それでは英語の場合はどうであろうか。英語では主語の省略は殆ど見受けられなかったものの、会話をデータとしているため、述部が省略されるというケースがある程度は観察された。例 10 では、単語の並列を強調するために動詞を省略しているとも受け取ることができる。ただ、「何が」あるいは「誰が」という動作主の部分は、はっきりと示されていた。

例 10) 合気道クラブ

- 19 Like it was a lot
 20 Like in a guidebook and handbook and everything.
 It said that it was really that's what you should expected. You've got to pay membership.
 21 Yeah.

英語においては、“like”というあいまい表現が多く見受けられた。しかし、日本語のように、主語を省略したかわりに“like”を使うのではなく、あくまでも‘agent’（動作主）は残したまま、会話が進行する際の息継ぎのような感覚で使われていると

いう印象を受けた。

また、日本語では、例 11 の 6 行目にあるように、第 3 者が自分たちを紹介してくれるというような場合には、普通は「彼女は私たちをクラブのメンバーに紹介できる」という言い方はしない。また、広告などから得た情報を伝えるためには、間違いなく「書かれていた」という形式で述べるのであるが、英語では、“it says ~”（書いている）という形式が用いられていた。この点からも明らかのように、日本語に比べて、英語では受動態で表現されるケースは会話においてはまれであった。

例 11) クラブのポスター

- 04 You know, Cynthia Bogal, the lady, with a kind of like
 05 A weird hair?
 06 Yeah, like she said she goes to a dojo and practice and stuff and she could recommend people, she could like introduce us to the club members and stuff
 07 Wow.
 08 And if you're interested and it says stuff like open practice
 09 Oh.

さらに、語順の倒置による体言止めや、語順の倒置そのものも英語では見受けられなかった。また、主語のかわりに所有格で主語となるものを示すことも行っていなかった。これらが示す意味とは、すなわち、英語においては、いつでも‘agent’（動作主）を明示的に示す必要がある言語のようだということである。

4.3 結果

これまで観察してきたことをまとめると、以下のよう示すことができる。たとえ統語的な構造の要素を加味したとしても、英語に比べて日本語の方が主語の省略が多く、また、主語の省略を助長するような言語表現の strategy（方法）が多く存在していることが明らかになった。すなわち、英語に比べて

日本語の方が‘agent’（動作主）を表現する必要が少なくなることが明らかになった。なぜならば、それに代わる言語表現の方法が数多く存在していたからである（表2を参照）。

表2：‘agent’（動作主）のあらわれかた

英語	日本語	
・あいまい表現	主語の省略	・体言止め ・語順の倒置 ・所有格 ・受動態 ・あいまい表現

5. 考察

それではなぜ、日本語の‘agentivity’（動作主性）は低く、英語の‘agentivity’（動作主性）が高いという観察結果が出たのであろうか。その理由には次のことが考えられる。

日本語が「個体」に焦点を当てる言語ではなく、「状況全体」に焦点をあてているという結果は、会話参加者のself（自己）をどのように捉えるのかという点が関わっているのではないだろうか。すなわち、会話を行う際には、自分がどの立場にあるのかによって、状況全体が変わる可能性がある。例えば、その場の雰囲気や相手の気持ちの変化、あるいは話されている話題そのものが、相手の興味のあるものであるか、あるいはそうではないか等といった、もろもろの要素によって影響されることにより、状況全体が変わる可能性があるため、そういった要素に対応するための表現形式が柔軟に用意されているのではないだろうか。

「個体」に焦点を当てないということは、動作主を強調しないということである。会話を行うものを取り巻く状況は、常に一定しているものではなく、たえず変化しているため、その状況全体を察知し、さらに会話参加者のintention（意図）を加味しつつ

言語表現を行うためには、動作主が強調されない方が良い。そのため、お互いの状況が把握できるような表現形式が多く存在したのではないだろうか。

もう一点考えられる理由がある。「個体」に焦点を当てる言語では、どうしても「話し手」に焦点が当たってしまう。しかしながら、「状況全体」に焦点を当てる日本語のような言語においては、「話し手」も「聞き手」も平等に状況の一部として溶け込んでしまうため、聞き手の言語行動も話し手と同等に、積極的に会話に参加することになる。そう考えると、語順の倒置や、体言止めといった要素のすべては、聞き手も含めた状況全体を把握するためのstrategy（方法）として考えることができるのではないだろうか。

6. おわりに

本論では、自然発話を観察することにより、日英語の特徴として広く知られている Ikegami の理論的枠組みが、実際の会話においてはどのようにあらわれているのかという点について一考察を行った。今後も具体的な会話の観察を行い、また英語と比較することによって、そこから見られる日本語の法則を探っていきたい。

参考文献

- 1) Bonvillain, Nancy. 1999. Language, Culture, and Communication: The Meaning of Messages. Prentice Hall
- 2) 池上嘉彦. 1981. 『するとなるの言語学』.
- 3) Ikegami, Yoshihiko. 1991. ‘DO-language’ and ‘BECOME-language’: Two Contrasting Types of Linguistic Representation. The Empire of Signs: Semiotic Essays on Japanese Culture, ed. By Yoshihiko Ikegami. Amsterdam: John Benjamins. 285-326.
- 4) B.L.ウオーフ. 1993. 池上嘉彦訳. 『言語・思考・現実』. 講談社学術文庫.